

「おっきい、これ、おっきい。チ×ポ、硬い。すっごく硬い。ねえ、先生のここに、香月くんのおつききて硬いの入れて。お願い、早く、お願い」

素子の教師としての面影は、すでにどこにもない。眼鏡は鼻の頭までずり落ち、唇の端からは涎が一筋垂れている。淫らに腰をくねらせる、一匹のメス犬と化していた。「これ、ここに入れて。早くっ！」

素子の手が、握ったカオルのペニスを、次から次へと溢れてくる愛液でてらてらに光った亀裂に導いた。先端に、やけどしそうなほどに熱い女の部分を感じて、さらにペニスが硬直する。

「硬い！ すご……はあ、んっ！」

素子は腰を浮かせて、カオルのペニスを啜くわえこんだ。

「は、入ってくる……んっ！ ふあ！ あ！」

カオルのペニスを、濡れて熱い粘膜が包んでいく。素子のなかは、やけどしそうなほどに熱い。まるで、糊のりを熱している鍋のなかに、ペニスを差しこんでいくように感じる。

「はあ！ すごいっ！ 入ってる！ 入ってるっ！」

半分ほど啜くわえこむと、素子は派手に腰を振りはじめた。



なかの褰が、ペニスを包み、こすれていく。自分の下で動物のように喘いでいる素子を見ていたら、カオルのなかで急速に野蛮ななにかが膨れていった。

素子の腰をつかみ、動きをとめた。

「やだ……やめないで、お願いっ！ いやああああああっ！」

髪を振り乱し、素子が暴れる。その中心めがけて、ぎこちないながらも勢いよく、カオルは腰を振り、素子の身体をえぐった。

セーラー服姿のカオルが、白のブラウスにタイトスカートの教師を犯している姿は、異様な光景だった。そんなカオルの姿に、倒錯した快感を覚えるのか、素子は尋常じゃなく乱れた。

「あ！ きゃうっ！ すごいつ！ 香月くん、すごいっ！」

小指を軽く噛んで、恍惚こうこつとした表情で素子はわめいた。

「へ、変態は、先生じゃないかよ……」

「ちが……変態じゃない……あ！ んっ！ ふあ！ あっ！」

慣れない刺激で、急速に射精感が高まっていく。我慢できない。

「せ、先生、出ちゃう……」

素子は首を振って、いやいやをした。

「だめよっ！ まだ！ まだよっ！ まだ出しちゃだめッ！ まだッ！ まだよッ！」
それでも、射精はとめられなかった。

「で、出るッ……んッ！」

その瞬間、カオルはペニスを引き抜いた。

「あッ！ だめッ！ いやッ！ 抜いちゃいやッ！」

素子の腰が、名残惜し（なごりおし）そうにカオルのペニスを追いかけた。

「んっ！」

短く唸（うな）つて、カオルは素子の身体めがけて思いきり射精した。

どびゅ、どっぴゅと派手にカオルのペニスは震えて、精子を放出する。素子の顔まで、精子は遠く飛んだ。

胸を、腹を……そして顔を、精子で真っ白に彩（いろど）った素子は、不満げに鼻を鳴らした。

「もう……まだって言ったじゃない……んッ！ はあ、はあはあ……」

荒い息混じりに、そう素子は呟いた。

「ご、ごめんなさい」

「しかたないわね……。初めてだもんね……。でも、今度はもっと長く我慢してね？」

女の子が達するまで、男の子は出しちゃダメなんだから……」